緑の地球ネットワーク
2014　黄土高原スタディツアー
体験記

2014. 8. 23 ～ 8. 29

認定特定非営利活動法人　緑の地球ネットワーク（GEN）
552-0012　大阪市港区市岡 1-4-24 住宅情報ビル 5F
TEL. 06-6576-6181　FAX. 06-6576-6182
E-mail gentree@s4. dion. ne. jp
URL http://homepage3. nifty. com/gentree/

【日程】

8 月 23 日（土）朝、日本出発。正午、北京空港着。列車で大同市へ　　明珠国際商務酒店

8 月 24 日（日）南天門自然植物園で活動　　明珠国際商務酒店

8 月 25 日（月）午前、渾源県呉城村アンズ畑見学

呉城村で昼食。午後、天鎮県へ　　天鎮温泉商務会館

8 月 26 日（火）午前、天鎮県 張 西河郷で植樹　午後、万里の長城見学　　雁北賓館

8 月 27 日（水）午前、緑の地球環境センターで活動

午後、采涼山、カササギの森見学

8 月 28 日（木）午前、雲崗石窟見学　午後、万人坑見学　　雁北賓館

スーパーで買い物　夜行列車で北京へ　　車中泊

8 月 29 日（金）早朝、北京着　首都博物館見学　帰国

＊＊＊

【参加者名簿】

Ｉ．Ｋ．	京都府	Ｉ．Ｋ．	福岡県
Ｉ．Ｓ．	岐阜県	Ｕ．Ｔ．	大阪府
Ｏ．Ｍ．	大阪府	Ｏ．Ｋ．	兵庫県
Ｏ．Ｈ．	兵庫県	Ｏ．Ｍ	奈良県
Ｋ．Ｍ	神奈川県	河本　公子	大阪府
Ｋ．Ｓ．	大阪府	Ｓ．Ｓ．	大阪府
高見　邦雄	兵庫県	Ｔ．Ｈ．	東京都
Ｎ．Ｔ．	大阪府	Ｆ．Ｋ．	静岡県
Ｈ．Ｈ．	大分県	前中　久行	大阪府
Ｍ．Ｏ．	西安市	Ｍ．Ｔ．	高知県
Ｍ．Ｎ．	静岡県	Ｙ．Ｈ．	東京都
Ｙ．Ｃ．	東京都	Ｙ．Ｙ．	東京都
Ｙ．Ｔ．	大阪府		

＊＊＊

【中国側スタッフ】

武春珍（緑色地球網絡大同事務所所長）　魏生学（緑色地球網絡大同事務所副所長）

郭宝青（　　〃　　運転手）　王　萍（　　〃　　通訳）

柴京雲（大同市総工会副主席）　李海静（　　〃　　スタッフ）

王丹丹（通訳）

〇8 月 23 日（土）晴れ

【N．T．記】
午前 10 時 20 分関西空港発で一路北京へ。北京空港で通訳の王女史の出迎えを受け、北京市内の天壇公園を足早に見学。一般市民に混じっての参観で何回も何回もチェックしながらはぐれる人もなく無事に出口迄。
北京駅 17 時 20 分発の雲城行きの太原旅客鉄道にて霊丘駅へ約 5 時間の列車の旅で、初顔合わせの人や旧知の人も実に和やかに交流がされ、明日からの作業や交流の上でいい基礎が早々と出来たように思った。
私自身は初参加でもっぱら体調を崩すことのないよう気を使った一日でした。
追記：王女史に教えてもらったことですが、この列車は三国志の時代の「関公」関羽雲長の故郷である雲城にちなんで“文化品牌列車”のブランド名で運行されている由で感慨を深くしたものでした。

【U．T．記】
北京空港の玄関口で RC 造の粗雑さにあきれていると、今度は天壇公園で極めて緻密な構造物を見せられていたく感心しました。両方の要素が共存しているんですね。
北京駅はエラく物々しい感じで、警備の警察官も、ガス銃やらライフルで武装し威圧しているように感じるのですが、まわりの人達はあまり気にしていないようにも見えます。

〇8 月 24 日（日）晴れ

【I．K．記】
霊丘県南天門自然動物園で活動。雲多いが日射あり後快晴
8:34　明珠国際商務酒店(ホテル)発、バス乗車
10:48　南天門自然植物園駐車広場、ここから徒歩
11:41　管理到着　トマト、ウリ等食べて休息
12:00　植林出発
12:35　植林終り　記念写真
12:50　管理棟で昼食　ラーメン、ソーセージ、ゆで卵など
13:28　自然植物園の観察に出発
16:30　バスに乗り帰路へ
17:18　ホテル着
・往路、唐河渓谷沿いの道で渋滞激しく、バスで 2 時間以上かかった。地層の露出した渓谷の景観は素晴らしかった。
・午後、高見さんの案内で蘇生した樹林を見に山に登った。管理棟で見せてもらった 1999 年起工時の写真に対比してアブラマツが随所に生育していること、水平道のナラ林が普通の樹林帯に生まれ変わっている様を見聞した。ここまで活動を積み重ねられ成果を実らせたことは驚きであった。
・霊丘県は四方を山に囲まれた広い平原で、雲南省のシャングリラとどこか似かよった伸びやかな展望の街であった。大きな新しいビルが沢山建てられ、開発が急速に達している様子である。いずれ飛行場もできそうに思われる。鉱物資源が豊富と聞いた。

【O．H．記】
すこし渋滞があって南天門自然植物園に着いたのはすでに 12 時前であった。バスを降りて小一時間歩いて園の入り口に到着したとき、先着のみなさんと“ニーハオ”と言いあっていたスタッフの

ひとりが目ざとく私を見つけ、近寄ってきて握手を求めた。私は彼の名前は知らなかったが一瞬で彼の顔を思い出した。

じつは2年前に私がここを訪れた折、植物の分類についてほとんど知識がなかった彼らが見事な標本を作成していることに対し、通訳をつうじて敬意を伝えたことがあった。私を覚えていてくれたのはそのせいではないかと推定している。

私は他人と付き合ううえで大切なことは相手を尊重することではないかと思っている。とりわけ当地の人びとの場合は。平型関の戦いや劉庄村の悲劇などを聞くにつけ、そのことが大事になってくると思う。今回は若い人たちが多く参加されているので、敢えて老人の小さな体験を記してみた。少しでも気にとめていただけたら幸いである。

【Y．Y．記】

7:00 朝食（バイキング形式）中国で初めての料理でしたが、思ったより薄味でおいしかった。温かい豆乳うまい。ただ my 塩があるとよいかも。

8:30 バスで南天門自然植物園へ出発。霊丘の渓谷で渋滞。大きく長いトラックが多数列を作っていた。乗用車やバスは対向車線を走って追い越していいらしいが、両側でそれをやれば当然ぶつかったところでまた渋滞。早いのか、遅くしているのか？よくわからない。渓谷はでかい。地層がよく見える。以前は過放牧で緑が線状にしかなかったが、最近は緑が回復したとか。ところどころに花が咲いていて、目を楽しませてくれました。早く降りて植物を近くで見たい。

10:45 やっと渋滞をぬけて南天門自然植物園に到着。前中先生に植物の名前を教えてもらいながら管理棟へ。クレマチスの原種、青いデルフィニウム、ムラサキモメンヅル、シソ科数種、ミズギク、オヒゲシバ？、ヨモギなどなど、日本と同じ種か？　近縁種だろうか？　美しい花をみながらの歩きは楽しい。キビとアワをはじめて見ました。いまや絶滅危惧種よりめずらしいのではないでしょうか。管理棟でマクワウリやトマトを食べる。皮ごと、種ごとのウリもおいしい。

11:45 記念植樹。1.5 m くらいのコノテガシワとマツ。けっこう重い。土は表面は堅いが、内はサクサク掘れる。日本よりもずいぶん深植え、20 本くらい植えました。水やりの時間がなく、あとは現地のスタッフにお願いしました。大変な作業を残してすいません。育ってくれるとうれしい。低木のなかのサクランボ大の赤い実（名前忘れた）を食べる。ほどよい酸味があり、じつにうまい。

12:45 昼食　カップラーメン、タマゴ、肉のソーセージ（うまい）マクワウリ、トマト

13:30 南天門へ山登り＆ナラ林観察絵。ゆっくり説明を聞きながら登る。でもちょっとハード。途中でナラ林へ斜面をトラバース。眺めがとてもよい。まわりの山やまや盆地の起伏などが一望できます。モンゴリナラ、リョウトウナラ、カバノキ、シャクナゲ、ゴゴメウツギ？ シャジンチドリ形のランなど楽しい。とくに低木なのにドングリの実をいっぱいつけているリョウトウナラはおもしろい。背の高いモンゴリナラと同じ種という話を聞き、植物の不思議を実感する。また、最近では土壌の分解者も増えて、落葉の分解もはやくなり、正の循環ができているという説明を受けた。多様性が回復してきているのだろう。今後が楽しみです。日本では当たり前のことが失われてしまう過放牧とは恐るべし。

15:15 その後、有志で南天門の稜線へ。眺望はすばらしいの一言。下りは足ががくがくになりました。みなさま、遅れてすいません。

18:30 夕食。めずらしいものばかりでしたが、とてもおいしかったです。白酒も料理に合います。

19:30 夜の講義（飲み会）を聞きたかったが、疲れと酒で倒れるように寝てしまいました。先輩方は元気で若いなあ。楽しい 1 日でした。

25:00 目が覚めて、日誌を書いて就寝。

〇8 月 25 日（月）晴れ

【H．H．記】
渾源県呉城村でアンズ果樹見学，農家で昼食・交流　天気晴れ
8:30　ホテル出発
10:30　県空寺に到着～県空寺を外から見学
11:20　アンズ果樹園見学
12:00　呉城村に到着～農家で昼食・交流，浸食谷見学
14:20　呉城村出発，天鎮へ
17:00　ホテル着
18:30　夕食

朝、ホテルの外に出たときはとても冷えこんでいた。日中は日本と変わらないくらい気温が上がるので、この温度差についていくのが大変。ホテルからバスで 2 時間ほど移動し、懸空寺に到着。外から見ただけだったが、懸空寺には来ないものと思っていたので大満足。

さらに 1 時間ほどバスで移動するが、窓から見える景観はほとんど変わらない。しかし、呉城村に近づくと、浸食谷があらわれてくる。

12 時ごろに呉城村に到着し、昼食をとる。どれもおいしかったが、個人的には羊の肉が最高だった。その後浸食谷をじっくり見学、底に畑があったので驚いた。

3 時間ほどバスで移動し、ホテルに到着。夕食は現地の人や中国人スタッフと食べて、とても楽しかった。温泉は久しぶりに湯船につかったのが良かった。今日は呉城村やホテルで多くの中国人に歓迎され驚いた。一部ではあるが日本人をこころよく思っている人がいてうれしかった。

【F．K．記】
昨晩の交流会は 10 時 30 分終了。片づけをしてシャワーをあび、起床が 6 時 15 分。あと 15 分と思い二度寝。ドアのノックで起こされ、時計を見たら 8 時 23 分。「ヤバイ！」と急いでパッキング。8 時 25 分河本さんより tel。あわててバスに急いだが 8 時 33 分にバスにたどりつく。ゴメンナサイ（反省）。当然、朝食ぬき。

バスは霊丘のホテルを出発して、一路渾源県呉城村へ。窓から見る風景は降雨量の少なさから全体的に生育不良。日本の私の菜園も梅雨明け後、雨がほとんど降らず。サトイモやサツマイモ、ヤーコンもおくれている状態。「植物の生育量は利用できる水に比例する」を実感する。

呉城村では、例年どおり貯水タンクのところで書記長の出迎えをうける。呉城村のアンズのできは、4 月上旬に花が咲いたが、5 月上旬の－5℃の低温で収穫がゼロとのこと。日本をふくめて世界的な異常気象。九州、四国、東北は大水害、それに対して東海は干ばつ、東京はゲリラ豪雨。人間が便利さを求めすぎているのでは…？「亡国を知らざるは即ち亡忘国なり」なんとかしなければ！！

例年通り呉城村の小学校前でアンズをお土産に買う。一昨年は 100 元だったが、今年は 200 元とのこと。2 倍になっていた。高いと感じたが、このお金が村に落ちると考え購入した。村長さんのお宅でごちそうになった昼食は本当においしかった。肉と米を除けば野菜はすべて地産・地消。農薬、化学肥料は使わない有機栽培とのこと。これが本当のゼイタク。食は商品ではない。「安全・安心」を最優先すればもっと豊かになると思った。

バスは呉城村を 3 時に出発して、恒山を見ながら途中懸空寺を遠くから見て、一路北へ向かい、天鎮県へ。北に行くほど、ポプラの小老樹が多くなる。
ホテルは温泉。この温泉には、雨のため作業ができず、使ったことがある苦い思い出がある。遠田先生が怒っていたことを思い出した。12 年程前のツアーのときだったと思いだした。
99 年から GEN のツアーに参加しているが、その頃は高速道路がなく、バスもマイクロバスであった。今年になって道路が非常によくなっている。たった 15 年でここまでよくなるとは！！　日本では考えられない。

【T．H．記】
8 月 23 日（土）の早朝羽田出発組 5 名のひとりで 2014GEN スタディツアーを開始しました。今夕天鎮県の温泉ホテルの部屋に落ち着いて日誌を書き始めました。早くも 3 日目が終了間際、今夕の夕食は地元名士参加のにぎやかな“白酒乾杯”の連続のようにて 3 日目はこれからかも知れませんが。
初日天壇公園で早くも“迷子”に。第二の H さんにはすべりこみセーフで東門からのバスの出発に間に合いましたが、GEN 河本さんはじめ皆様にご心配ご迷惑をおかけしました。古くからの習性で名所旧跡では要所要所の解説看板、地図に見入るのです。広い国内の群衆のなか、それでも最後（に近い）“皇穹宇”の中庭まではぐれずについていったのです。最後に“殿”の階段の列にみなが行列を作ったと思いこんだのが運のつき、坂を登るのが苦手な私はパスしてみなさんが見学終了し左手から降りてくるのを待ちながら見物していたのです。果たして待てど暮らせど GEN 一行様降りてくる気配なし、しまったと行列のひとりひとりを下からチェック、だれもいない。
通訳さんが「はぐれた時は東門駐車場に移動したバスへ」を頼りに広い園内をひたすら東門へ向かいました。20～30 分は歩いたでしょうか。東門を出て右手のバスの前で手を振ってくれた皆様に大変感謝、大反省です。
16 年近くの名ばかり会員ですが、現地視察は長い間の宿題でした。私にとっての GEN とのかかわりはひとつには日本人としての環境自己防衛、ひとつには中国に対する贖罪があります。緑化活動は黄砂等飛来による日本の環境悪化防衛の一助であり、自己のための活動であるとの整理でもあり、もうひとつはだれが何と弁明美化しようと、他人の土地にワザワザやって来て農地を取りあげ、戦闘行為中とはいえ、兵士はおろか住民まで殺傷する行為は絶対的な罪であり、一兵卒として満州事変に参戦した父（一言も話さなかったですが）の子として、個人としての贖罪は、この日中戦争激戦地の大同で静かに祈りたいとの思いです。GEN の活動拠点の多くがまさしく激戦地で、多くの人びとが犠牲になり、それだけに当初の苦労話と今 20 余年の地道な活動が根づいている成果を現場で感じとることができました。南天門自然植物園のスタッフの方がたや、呉城村でご馳走になった農家のご夫妻やご家族、村の広場に集まってくれた多くの村人の表情は GEN、日本人の活動を評価しているように感じました。
呼吸器疾患と語学力不足で役立たずのツアー参加者ですが、残る 3 日間も正しい現実を感じとり、日本で周辺に伝え GEN 活動の宣伝に貢献できたらと考えます。

【K．S．記】
今回のワーキングツアー参加で 7 回目になる。毎回訪問するコースも場所（今回は何年ぶりかで新設になった万人坑を訪問）もほぼ同じなので現職中ビジネスに関係していた視点より今回訪問した中国全体の感想を述べてみたい。
中国を訪れるたびにおどろくのは、北京、上海をはじめとする主要都市を中心に全国地方都市にいたるまで発展がすさまじいことである。大同をとってみても十年前と比べて町の中心部（立派な城壁ができている）、郊外とも様変わりになっている。とくに道路網の整備と住宅（高層マンション）建設がすさまじい。100 m 幅の道路が縦横に延び、高層マンション、敷地 300 坪程度の一戸建て豪邸が林立している。
これらの総投資額は半端な額ではないだろう。おそらく日本の新聞、テレビで報道されているよ

うに政府の把握されていない金融機関、いわゆるシャドーバンキング（影の銀行）等からの資金で地方政府がなかば強制的に農民を立ち退かせ、道路、住宅を建設したものと思われる。しかも建物が完成、売却済みとおもわれる建物もたくさんあるが、夜はそれらの建物に灯がついている住居がほとんどみられない。おそらく不動産会社が 10 戸～50 戸とまとめて買いこんで値上がりを待っているのだろう。

住宅は人が住んでこそ価値が出るのであって、売れてはいるがひとが住まないのであれば 30 年前の日本の不動産バブル時代と同じである。

中国政府もいろいろ手を打っているようだが、いずれバブルが崩壊する時期がくるのではないだろうか。

しかし北京をはじめ各地をまわってみると実に中国は豊かになってきていることが実感できます。今回訪問した山西省でも、各県どうしは高速道路網でつながり、人口数百人の村でさえ、かならず前回訪問時にはなかった健康器具、村内 50 m 間隔にソーラーを利用した街灯（以前農村で 1 泊したとき、夜は一寸先は闇夜）が設置され、農民、子どもたちの服装もずいぶんこぎれいになっている。

今回の中国訪問で、従来の私の感覚では中国の沿岸部は先進国、内陸部は後進国と認識していましたが、10 年前のように内陸部の後進国（中進国？）に来たような感じはなく、日本の地方を訪問しているのと錯覚するほどでした。

だが一方では北京国際空港に降り立つとスモッグで先が見えない空気汚染、二酸化炭素をまきちらす交通渋滞等これからの中国の課題は我われの緑化を含めた国境を選ばない環境問題の解決が最優先であることが実感できたツアーでした。

“我们应该爱护大自然保护环境”

〇8 月 26 日（火）晴れ

【Ｓ．Ｓ．記】

7 時朝食。バイキング。牛乳がないので豆乳を飲む。豆乳はそれほどおいしいとは思っていなかったが、たまたま前中さんが砂糖をたっぷり入れているのを見てまねてみる。なかなかいけるなと思う。

8 時過ぎにロビー集合。日誌を渡されて当番になっていたことを知る。今日は心してメモをとらねば。苦手だなー。

今日の活動は地球環境林の一環として村が行う活動に GEN が協力するという位置づけであると代表の説明。

8 時半出発。一路天鎮県張西河郷に向かう。今日通る道は、昨日道路工事のため通行禁止の連絡があったが、現地スタッフの迅速な対応で特別に通行許可を出してもらったという。中国の道路工事は片側ずつではなくて、交通を止めて一挙に行うらしい。道路上にセメント袋がゴロゴロ置いてあり、その場で開いて砂を混ぜるらしい。日本のアスファルト道路工事の趣とは大分異なる。例年は公安の車が前後についていたが今年はないということ。

両側にポプラとしだれ柳の並木道を一路東へ。10 時前に天鎮県張西河郷に到着。歩くこと 40 分程で植林活動の現場へ。村の人々が準備をして待っていた。植え方の簡単な説明のあと、各人、マツの苗とスコップを持って作業にかかる。春に植えた松で根付かずに枯れたものは取り除いて植え換える。1 時間程の活動で植え付けをしたのは 6～7 本か。

なお、この植林場までの途中には深い浸食谷が走り、一見近くに見えるところも間に浸食谷があり回り道をせねばならないところがある。かつてこの地を侵略した日本軍はこの浸食谷を「地隙」と呼んでいたそうである。歴史の文献上でみるこの周辺の戦闘に臨場感を覚える。さらに途中の段々畑の跡とみられるところは現在は草や小さな木が生えているのが散見された。「退耕還林」の途上にあるところだろう。

昼食は張西郷共産党中央委員会の入る建物。いつものようにボリュームたっぷり。盛り合わせには金属のボールやプラスチックの洗いおけも使われていた。この村でこんな多くの人数の食事を準備することはあまりないのだろう。かなりの苦労をかけたことだろう。料理の内容は割愛する。

13：40　この地を出発して長城に向かう。途中の道には風力発電の支柱とおぼしきものを載せたトレーラーが何台も駐車しており、バスはその側の狭いところを通り抜ける。かなりの高度な技術だと感じることしきり。

天鎮県の野菜は現在、北京市でブランド品になっており人気が高いそうである。河北省との省境に接するこの県は北京まで 100 km 以下。きゅうり、トマト、ナスなどの有機栽培を売りものにしているそうだ。ちなみに高見事務局長は天鎮県名誉県民であるそうな。

14：30　李二口古長城に到着。日本人の観光客にはあまりなじみのないところだが、長城の本来の姿がよりわかるところだろう。若い人に混じって兎に角、眺望台の傍まで登った。「バカと煙は高い所に」の本性まるだし。

15：30　出発、大同へ。途中、メガソーラーの広い施設が見える。300 万メガワットの発電をめざしているそうだ。さらに、高速道路左側マツの林がみえる。ここは 1997～2002 年の 6 年間にわたり GEN が協力した「金山寺プロジェクト」のマツの木が今では 4～5 m に成長しているそうである。大同火山群と呼ばれる火山もみられた。その中の山の頂上付近に浄土宗の寺がみえる。私にとってはある理由があって 20 年以上前に山西省太原の南にある浄土宗の玄中寺を訪れたことが急に思い出された。

17：30　バスは大同市内雁北賓館に到着した。

【Ｙ．Ｃ．記】

快晴。朝 6 時 30 分ごろ、ホテルの窓から見える記にスズメがたくさんとまっていた。どこのスズメもかわいいなと眺めていたら、カササギがスーッと飛行。カササギを見るといいことがあるらしい。幸先がいい♪

8 時 34 分バスが出発。植樹へ。途中「前方施行」「止通行」の門あり。道路工事のため通行が制限されているところが！　本来は通れないところであったが、大同事務所の魏さんがいろいろなところに連絡をして口をきいてくださり、通してもらえることに。とても頼りになる。バスは土をかためて養生シートをはったうえをゴトゴトと進んでいく。しばらくして驚きの工法を目の当りにする。セメントの粉を地面に直接まいてただならしているのだ。道路作りについてまったく知識のない私だが、びっくりした。セメント車が見当たらない。その場で水を混ぜるのだろうか。完成を見てみたい。しかし、工事のはやさは目を見張るものがある。

9 時 25 分到着。植物観察や談笑をしながら植樹の現場まで歩く。浸食谷を眺めながら斜面を登っていく。振り返れば段々につながる緑の畑と山々。広びろとした風景を前にカメラのシャッターを次つぎと押す。気分はハイビジョン♪

10 時 30 分植林作業開始。中国人のかたとペアになってマツを植えることに。穴を掘ってもらって、私が苗をそなえつける。ビニールの下と上は水が吸収しやすいようにやぶってから土をかけてもらう。私は中国語がまったくできないけれど、おじさんと息があったような気がする。順調に植えつけていった。作業は 40 分ほどで終了。１本でも多く残りますように。

バスに向かう途中にＯ．Ｈ．さんに甘草を教えてもらう。漢方薬になるそうで、Ｏさんはこの地に甘草があるのか確認されていた。甘草の根を 2 mm くらい切ったものをガシガシとかんでみた。はじめに苦みと甘みを感じ、かんでいくほどに甘みが増した。最後には甘みが口いっぱいに広がった。間違いなく甘草だ。漢方の世界が身近になったこと、それ以上にいろんな世界を深く追求されているかたとお話できてうれしかった。

12 時 30 分役場にて昼食。これまた豪華な品々に舌鼓♪　中でもキビを蒸したものがモチモチっとしながら素朴な甘みがあっておいしかった。おいしいお食事をどうもありがとうございました。

午後、万里の長城へ。土壁が目の前に広がる。ぐんぐんと歩いて登り、壁の上に登りやすそうなところを探して上がってみた。高く不安定な場所である上に見渡すかぎり壮大な景色に足が震え

た。万里の長城、田園、ヒツジの群れ、列車、山々。ずっと見ていたかった。降りるとき、ズルズルとすべり尻もちをついた。

バスの車窓から金山寺付近のマツの樹林を見ることができた。97 年から植樹によりできたものだと高見さんから説明をうけた。地肌が見えていた今までの山とは違い、緑々としたマツ林が広がっていた。ひとつの成功例を見ることができた。わたしが植えたマツもこのように成長してくれればいいのだが。

ホテル到着。雁北賓館はとても快適。今日も充実した内容の濃〜い 1 日だった。長い活動の積み重ねを感じる旅。謝謝。

10 時 40 分城壁に花火が上がる。

今日出会った植物

ハマビシ　スティパ　百里香の花　ハマビシ　ニレ　寧条（ニンティァオ）ムレスズメ属　甘草（カンゾウ）　狼毒（ロウドク）　風毛菊属（フォンマオチ）　沙藍棘頭（サラジートウ）　山青蘭（シャンチンラン）　芨芨草（チーチーツァオ）　ユウガギク　野生のネギ

【Y．T．記】

天鎮県張西河郷史家窑村の張西河郷”地球環境林”での植林活動と古長城見学

8:30　温泉賓館出発
9:30　植林現場(地球環境林)の山麓到着。現場へ登行。
10:10〜10:30　全員現場到着，植林開始
11:10　植林完了
11:20　下山開始
12:00　山麓到着
12:00〜　張西河郷党委員会で昼食
13:40　出発
14:35　李二口古長城到着，長城見学
15:30　古長城出発
17:30　雁北賓館着
18:30　夕食

張西河郷の”地球環境林”の植林現場は段々畑が天まで続いているような丘陵の頂上近くにあり、登りに約 50 分、下りに約 40 分程かかった。現場は既に史家窑村の村民 10 人近くがアブラマツの苗とスコップやペットボトルなどを用意していた。横断幕も張られていて、植林の雰囲気を盛り上げていた。

前中代表から、この場所は今年の春植樹をしたが多くが枯れてしまったので、今回はその補充植樹であること、また植樹の方法などについて説明があった。既に多くの穴が掘られていて、植樹は順調に進んだ。時間の制限もあり 40 分くらいの植樹に終わったが、ざっと見で 150 本前後植えたのではないだろうか。ただ気がかりだったのは、今年の日照りのせいで、水やりの水が用意できず、これからの降水に期待するとのこと。是非とも雨が降って欲しいものだ。

植林現場から見渡す景色は一面の段々畑。もともと食糧増産の為の穀類栽培地だったが、今は退耕環林であんずや豆科の寧条などが植えられている。そして段々畑のところどころに、黄土高原特有の土砂流出による深く切り込まれた谷が見られる。このような植林活動を継続することによって、強雨による土砂流出が少なくなり、より安定した農業環境が形成されることを強く願った。

昼食は張西河郷党委員会でとった。料理は、野菜のあえもの、豚肉、じゃがいも、ニラの煮物、豚肉とピーマン炒め、セロリと豚肉の炒め、羊の内臓とじゃがいも麺のスープ、きびもち、とうふ、かぼちゃ、じゃがいも、いんげんの煮物、骨付き羊肉の煮つけ、平茸の炒め、ゆで卵、それにマントウとご飯。飲み物は、ビールと天鎮産の二鍋頭。北京産の二鍋頭をここでも作っているようだ。

食事の後、帰路の途中、長城見学に。もともと小学生との交流を予定していたが、新学期が始まっ

ていないので変更したとのこと。李二口古長城は明代の長城で、版築によるもの。秋高気爽＝どこまでも青く高い大空とさわやかな風のもと、雄大な歴史遺産をながめることができ、また植林の後でもあったので、とても豊かな充たされた気分で帰路につくことができた。楽しい一日であった。

【K．M．記】

昨夜は天鎮温泉商務会館に泊まり、温泉に入る。中国のホテルにはバスタブがないので、この温泉は気持ちがよかった。朝目が覚めると、室内はひんやりしていた。壊れて閉まらない窓から少し冷気が入っていた。カーテンを開けると、朝日がさし、遠くにはモヤがかかっていた。朝食前にホテルのまわりを散策。まわりには高い建物はなく、あるのは青空と背の低い木と向かいの果樹園だけ。空が広く、空気も澄んでいて気持ちがよかった。経度が日本の青森と同じくらいということで、かなり涼しく、口からは白い息がでた。

朝食は中華料理バイキング。どれもおいしい。わたしのイチオシはトマトと卵の炒め物！！　中国の家庭料理だそうだ。少し甘めの豆乳も good。

朝食後、天鎮県張西河郷へ向けて出発。バスで 1 時間ほどで到着。そこから歩いて植林エリアまでさらに 1 時間。朝とはうって変わって日差しが強く、とても暑い。

今回は、今年の春に植えたマツが活着していないということで、枯れているマツがあれば新しいマツ苗とかえて、ほかに新しく穴を掘りマツ苗を植えていく作業。何とか活着し、大きくなって！と祈りつつ土をかける。

昼食は天鎮県張西河郷委員会（役所）にて。ここの料理もとてもおいしい。珍しい料理としては羊雑（ヤンザー）という料理。私の気に入った料理は“骨付き羊肉の煮込み”と“セロリと豚肉の炒め物”。

午後は万里の長城へ。移動途中のバスの中ではみなグッスリ。お昼の白酒とビールがよく効いているみたい。

万里の長城は石のブロックではなく、土を固めて積んだもの。短い時間だったが、上に登り写真撮影。少々観光気分。それにしてもこれだけ高く長い壁をよく人力で作ったものだ。その後、大同市内の雁北賓館へ向かう。移動中のバスの中で高見さんより説明があった。金山寺という火山のふもとに GEN が植えてきたマツが今年の春で 5.5 m になり、大きく成長しているという。約 20 年がかりとのこと。私が植えたわけではないが、枯れずに大きく育っていることは、とてもうれしいニュースだ。

夜は晩ごはんのあとにホテルの外へ出てブラブラ。GEN の河本さんとツアーメンバー女子 3 人でコンビニへ行き、アイスを買い、ホテル前の旧市街地を囲む城壁を見学に行く。こんな時間が楽しい。

今回このツアーに参加させていただき、ありがとうございました。GEN の日本と大同事務所の方がたと、この活動を支えてこられた先輩方にお礼を申し上げます。

〇8 月 27 日（水）晴れのちくもり

【M．N．記】

中国に来て早いもので 5 日が経ちました。初めての中国ということで緊張していましたが、GEN 参加の方々や現地の方もとても優しくこのツアーを楽しめています。

今日は緑の地球環境センターにて活動を行いました。まず環境センター内を見学しましたが、南北 400 m、東西 500 m とその広さに驚きました。私自身、植物にはまったく詳しくないので、植物の説明ひとつひとつが新鮮で、とても興味深いものばかりでした。環境センターには様々な植物が植えられていましたが、すき間があれば他の植物を植えるあたりが中国らしいなと感じました。環境センター内の見学を終え、植樹活動を行いました。昨日もマツの苗を植えましたが、その時、現地の方はビニール袋を苗からとらずに植えろと言っていましたが、これでは水を通すことができ

ません。これは中国で数年前からビニールをとるなと言われているため、現地の方はとらずに植えていたそうです。しかし、GEN でビニールからとらずに植えたもの、ビニールの下だけやぶいたもの、キレイにとったものの成長の様子を調べたところ、やはりキレイにビニール袋をとったものの方が成長が良いという結果だそうで、しかも 3 年で 1 年の成長の差があるというのにも驚きました。

お昼は管理棟でいただきました。中国の料理は口に合うか心配で常にカロリーメイトをバックに入れておいたのですが、まったく必要ないほどどれもおいしいものばかりでした。ただビールが冷えていたらよりおいしいのにな、と思いました。

午後はマツの葉をひたすら枝からちぎりとる作業をしました。これはビニール袋をつけたままの苗とキレイにとった苗とでは葉の量、重さなどどれぐらい違うのかを調べるために行いました。実際に見てみるとキレイにビニール袋をとったものの方が葉の量も多く、葉の長さも長いように感じました。

その後、環境地球林センター、カササギの森へ行きました。条件の悪い土地の中でマツが立派に育ったのには様々な技術とその人の思いによって育ったんだと感動しました。

残りあと 2 日ですが、いろんなことを吸収して日本へ帰れるように過ごしたいと思います。

【M．T．記】

昨夜の YANBEI HOTEL（雁北賓館）の宿泊に満足。水の不自由もなく、食事も変化あり。今日から副医院長の王萍さん同行するとのこと。それも 1995 年からボランティア参加してくださっているとの紹介。環境センターでは地元のかたと植樹作業できて良かった。昼食もおいしい魚料理に満足。時間が少ないのか、感謝の気持ちを伝えることができなかったのは残念。

采涼山プロジェクトについて、現地での説明勉強になりました。南側斜面は木にとっては不適。水分蒸発や冷下における細胞破裂発生。それを克服する土盛り。そして土盛りの北面に植付けること、雨水が溜まるようにしてあること。全体としては村と協力して環境緑化に取り組んだことが成功では、と感じています。

【前中久行記】

午前中は緑の地球環境林センターの見学と，枯れた松苗の補植。昼食もセンターで。昼食後は「マツ苗のビニール袋の取り扱いが、マツ苗移植後の成長に関する試験」の測定のためのマツの葉むしり。その後、采涼山地球環境林とカササギの森の見学。道路工事のため、大きく迂回して大同県県城、なんとか寺の下を通った。夜はしゃぶしゃぶ専門店でしゃぶしゃぶ。

【M．O．記】

今回、ツアーに参加させていただいた動機は、中国の植林活動は数あれど、その実態はどのようになっているのかを調べる必要があったからです。

私の感想としては GEN の活動は「木を植える」だけにとどまらず、その地域の植生を研究し、その地域活動、経済の持続発展を可能にする活動であると思いました。そこにスケールの大きさを感じます。

行く先々で印象的であったことは、過去に日本との間で悲惨な出来事があった地域の人びとが、植樹活動に手を貸していただいており、また気持ちよく団を迎えてくださったことです。このような姿を見ることができるまでには、GEN 関係者の方がたの多大な努力があったことは言うまでもありあません。農村でのご飯の味は感慨深いものがありました。

私の知識不足から、わからないことが多くありましたが、GEN ツアーに参加されている方がたが親切に教えてくださり、非常に密度の濃い時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

今後は少し勉強してから参加し、より密度の濃い時間を過ごしたいと考えています。

○8 月 28 日（木）晴れときどき雨ぱらつく

【O．M．記】

緑化関連の活動は昨日で終わり、今日は大同での観光と見学。雲崗石窟に向かうバスの中で、市内ガイドの王さんから山西省の歴史や大同市の概況について説明を受けた。山西省を含む黄河流域は中国で最も古くから開けており 5000 年の歴史を持つ。もともとは遊牧民族の土地であったがのちには漢民族が支配的になった。この場所は明代には平城と呼ばれたが、多くの民族の入れ替わりの歴史を踏まえて多民族大同団結の意味で大同と名付けられた。炭鉱がありエネルギー都市である。雲崗石窟はここが北魏の首都であった時代に造られた。楠森さんから、日本では飛鳥時代に当たり、長い耳たぶが特徴的な飛鳥大仏と酷似していて当時の交流の深さを物語っている、との補足説明があった。

7 年前に雲崗石窟を訪れたことのある私は、雲崗石窟の入り口に着いてから大いに驚いた。あの時にはなかった曇曜の像や入口の門のみならず中には寺院までできているではないか。2009 年から 3 年がかりの工事で完成したのだという。総工費 500 億円というが我われ 60 歳以上は入場無料だった。王さんのガイドで第一窟から観て回った。第九～第十三窟は修復中で囲いがなされていて観ることができなかったが、第十四窟以降の仏様の大きさに改めて圧倒された。第十四窟が北魏時代の本来の第一窟でここに石窟仏を作ったのは曇曜で彼はウイグル族であるという。第二十窟の前で記念の集合写真。出口に向かう途中で樹上にカササギを見た。盛んに鳴いていた。7 年前と大いに違うのは、周囲がすべて植栽されていて緑が豊かになっていること。しかし、かなりの割合でマツが弱っているのを見てこの地の環境の厳しさを改めて感じた。

昼食は羊蠍子（ヤンシエズ）。羊のぶつ切り背骨を煮込んだ鍋物。味は良かった。

午後は大同炭鉱万人坑遺跡へ。今回のツアーに参加するに当たってかなり意識していた所だ。見学という言葉はそぐわない。到着してすぐ、見上げる山の斜面一面に剣山のように立つ墓標に胸を打たれた。資料館の前でU．M．先生の説明を聞いた。建物の壁の対角線上にある 14,000,000 と 60,000 の数字は収奪された石炭のトン数と踏みにじられた命の数だとあとで知った。山の中腹まで続く階段を上がって万人坑遺跡へ。苦しげに折り重なる骸骨を前に言葉もない。ただただ合掌。罪を詫び、肝に銘じ、子孫に伝え、二度と繰り返しませんと誓った。続いて資料館へ入った。過酷な労働、出水、爆発火災、疫病等々で命を失い、また生きながらに放擲され遺骸となっていった人々。中でも 11、12 歳の子どもも働かされていたことを知り、あの骸骨の山に埋もれていたのだと思うと辛かった。日本語での解説も書かれている展示の数々を見ながら、今自分がここに立って居られるのも、日中がまがりなりにも平和であるからで、平和である内にこそ戦争の惨禍を直視しなければならないのだと改めて思った。

予定の時間が来てバスに乗り、大同市街に戻りウォルマートで各自買い物。そのあとホテルに戻って、大同市総工会主催の交流晩餐会。総工会副主席・柴京雲さん、緑色地球網絡大同事務所所長・武春珍さんから歓迎の挨拶のあと乾杯。続いてツアー参加者を代表して参加 20 回目のＩ．K．さん、学生と共に何度も来ているU．M．先生が挨拶。それぞれから山西省の緑化が進み、人々の生活が良くなってきていることが語られた。目に美しく美味なる料理の数々に舌鼓を打ち、乾杯を重ね、和やかな宴であった。やがて時間が来て、ホテルの前でお世話になった現地スタッフ並びに前中先生、高見さんと別れを告げてバスに乗り込み、国鉄大同駅に向かった。あとは夜行列車で一路北京へ。まだ、北京での半日が残ってはいるが、緑化という切り口を通して草の根の日中友好が進んでいることを知ることができ有意義なツアー参加であった（帰国後加筆訂正しました）。

【O．M．記】

昨夜雨が降ったもよう。道路に水が溜っている。朝食は 7 時からなので、その前に大同市の城壁の中に行ってみる。GEN 事務局の河本さんに一緒に行ってもらう。城壁とは外敵から守るため市街全部を囲っていたらしい。幅広い城壁をくぐり、電柱がいっぱい立っている市街地をほんの少し

だけ見る。露店で果物を買う。スモモ 2 個、洋ナシに似たもの 2 個。量り売りで 3 元でした。
　城壁の外は整備された公園で、ジョギングする人やダンスをする婦人たちと、どこの町でも見かける早朝風景でした。
　今日は作業はなく雲崗石窟見学。8 時 30 分バスで出発。ガイドに王さんがついてくれる。王さんが多いけれど見学ガイドの王さんは屈強な男性です。雲崗石窟は砂岩の山を掘って仏像や修行場を作ったお寺。新しく御堂や門が作られている。風化が激しくてお顔のほとんどわからない仏像や、また極彩色がきれいに残っているものなどいろいろ。有名な最大の仏像は第 5 号石窟像。高さ 17.7m、真下に立って見上げると上から落ちてくるようなすごい迫力。奈良の大仏さんと同じくらいらしいけど、大仏さんにはひざ元には近づけないのでこれほどの迫力はないなぁ～。
　出口の土産物屋で数珠？ブレスレット？をのぞく。あまり欲しいものはなかったけれど手にとっていると 100 元と言う。いらないと置くとどんどん下がり 30 元になった。高いか安いかわからないけれど自分への記念に買いました。昼食は羊蠍子、羊肉のぶつ切りの煮込み。毎日毎食ごちそうばかりです。
　午後は万人坑見学。大同は炭鉱の町、今も石炭産業の重要都市。1937 年日中戦争が始まったとき、日本軍は素早く大同を制圧・支配した。石炭を大量に掘るため、現地の人を過酷な状況で働かせ、亡くなった人ばかりでなく、弱った人は息のあるのに埋めたという。散乱する白骨を展示してある。人間は力を持つとどうして傲慢になるのだろう。歴史のひとコマではなく今も同じことが違うかたちでおこなわれていると思う。
　私の中国語について少し書きます。私は以前年間も中国語を習っていました。しかし実践する機会は少なく、勉強をやめてから 10 年が過ぎています。でもこの度でちょっと話したいなぁ～。夕べホテルに帰ったら、トイレットペーパーがほとんどなかった。もう一泊するのに。大胆にもフロントに電話をし、「請給我們衛生紙（トイレットペーパーをください）」と言ったつもり。だがルームナンバーを間違って伝えた。むこうの言うことはわからない。しかししばらくするとドアがノックされてボーイが来た。トイレットペーパーを指して「還有一個（もうひとつ）」と言ったら伝わった。イエイ！
　また今朝エレベーターで一緒になった男の子に「你几岁了（いくつですか）？」と聞いたら少し考えて答えてくれたけどわからなかった。一緒に乗っていた学習院大学の先生が「英語ですね、4 歳って言ってます」って。なんでやねん。でもいろいろ楽しかったなぁ～。

【O．K．記】
8 時 40 分ごろにホテルを出発，雲崗石窟へ。
　大同市ガイドの王さんが言うには、中国 3 大石窟の 1 つなのだそうな。どんなものなのだろう。道中、王さんのお国自慢（？）の大同市ガイド。大同が晋の首府だったとは知らなかった。ということは、ここ数日“中原”を見ていたことになる。結構、部分的な起伏はあるけれど、ここ数日で見た範囲が春秋戦国から三国志の時代にかけての歴史舞台のごく一部でしかないということなので…、中国は広い、とあらためて思いました。この広さは、来て、見てみないと分からないです。
　石窟の川向こうには炭鉱があり、大同が石炭の町だとアピールしているかのよう。川にはバスの車窓から見る限り流れがあった。

　石窟の公園（？）は、入り口から入ると径路がお寺の中を通り抜けるようになっていた。このお寺は 5 年ほど前に建てられたものとのこと。寺の中にあった仏像は，観光用に作られたもののような感じがして、興味を持てなかった。共産国中国で、宗教心から仏像を作るだろうかと疑ってしまったのも理由の 1 つ。
　第 5 石窟、第 6 石窟の仏像前の建物

や第 20 石窟の仏像は本当に大きく、迫力満点。生で見れて良かった。
石窟自体の仏像群については、もっと顔を見れば良かったかも知れない。顔をよく見れば作った人がどの民族の人か推察することができるという話を聞いたので。問題は私に民族による顔の違いが分かるかなのですが…。ガイドさんは彫られている仏像が壊れたり痛んだりしているのは、すべて風化したため、と言っていたが大いに怪しい。大部分は風化でしょうが、一部明らかに顔をそぎ落とされたものがあので。アフガニスタンでタリバンが巨大な石仏の顔をそぎ取るようにして破壊した、というニュースを見た記憶がありますが、あの破壊の仕方のミニチュア版を見た感じだったので、きっと同じように顔をそぎ落とされたのではないかと思いました。でもよく考えてみるとそのようなものはごく一部。なぜなのだろう？
仏像は岩を削っただけだと思っていたが、岩を削ったものを芯として、上に泥を塗り彩色して仕上げているとのこと。こんな細かいことは現地に来なければ聞かないかもしれない。少なくとも、聞いても聞き流して忘れたでしょうから。
石窟群の前には公園が整備されていた。緑が多い。ツアー参加前なら単にそうとしか見なかったと思うが、一応植樹作業も手伝ったので、ついつい木々の根元を見てしまう。見た限り”樹”はすべて植えたものだった。これだけの数の木を植えるとは。公園を作ろう、緑を多くしようとの意志の強さを感じた。しかし、植物の定着、緑化の観点は弱そうに思えた。大きな木を植樹したのが多く、松ぼっくりが異常に多いマツや、茶色く枯死しかけているものが多く目についた。今年は雨が少ないとのことなのでそれが原因だと思うが、枯れずに済んで欲しいものだ。
昼食は羊料理。何故か憲法第 9 条の話になった。中国残留孤児に関する話も、現地で直接見聞きしてきた人から話には独特の迫力がある。
その後万人坑へ。事前知識なしでも、字を見れば大体どんなところかは想像がつく。戦中の炭鉱の痕だとまでは分からなかったが。
とにかく行って見るべきとしか言いようがない。言葉で説明できるものではないと思う。僕は鎮魂慰霊の祈りを捧げるので精一杯だった。写真を撮る藤原さんに「僕には撮れません」とつぶやいたら、「でも伝えないと（いけないでしょう）」と言われました。累々たるものに退いてしまうだけでは、確かに伝えられない。こういったものをどうやって息子に伝えていくべきか、しばし悩んだ。まずは、機会があるごとにいろいろと見せていくことかと思う。
記念館の最後のコーナーにもあったが、周恩来が「日本軍国主義は、中国人民・日本人民の共通の敵だった」と述べていることはもっと知られても良いと思う。何も、“敵”を日本軍国主義に限定する必要はなく、戦争をしたがる者すべてと考えて良いと思うし、人民も中国と日本に限定する必要もないはずです。
夕食後、ホテルで軽く休憩してから、大同駅から夜行列車で北京へ。行きは開放 3 段寝台だったが、今度はコンパートメント形式の 2 段ベット。起きられるか心配だったが、乗務員さんが起こしに来てくれたので大丈夫だった。他の 3 つのベットはどうやら 1 家族のようで、お子さんがお父さんと一緒に寝ていたのが可愛かった。降りがけにパパさんに「お子さんへ」と残り物のあめ玉をプレゼント。言葉が分からないので身振りで伝えたが、分かってもらえたようでうれしかった。

8 月 28 日以外の話
北京首都空港がとにかく広い。霞がかかっていて視界が良くないのもあり分かりにくいが、関空（2 期も含め）の数倍ありそうな感じ。オリンピックにあわせて工事したとのこと。ターミナルビルも複数。ターミナルビル間は、関空のように新交通システム（神戸のポートライナーのようなもの）で結んでいたが、関空と比べて速かった。空港へのアクセス鉄道はないように見えた。そのうち作るのかな。（後日、北京の鉄道路線地図を入手したら、空港への鉄道路線が載っていたが…）
空港ひとつであっても、みなさん、目を留める場所が違うのが興味深かった。日頃関心を持っているジャンルや、専門分野、趣味などの方向性が違うと、目を留めるところが全く違うというのが面白い。多彩な人がいる楽しさを感じた。
空港から市内へは高速道路を使ってバスで移動。「路側帯通行禁止」と書かれているとおぼしき

標識があったが、タクシーも含めみな平気で路側帯を走っていた。市内でも信号は厳守されているようには見えない。後日見たTVCMでは5本中2本がマナーアップキャンペーンだった。ルールやマナーはさほど守られていないのだと実感。

中国は右側通行の国だけど、常時右折可の交差点が多いように思えた。実際どうなのだろう。常時右折可では歩行者が渡りにくいのだけど。

空港で見たTVは赤が強く鮮やか。日本の色バランスとは明らかに違う。こんなところにもお国柄が出ていた。市中の電光掲示看板なども、とことん赤文字。日本では白文字表示になりそうなところもとことん赤文字。とにかく赤が多い。はじめはLED技術が古くて赤ばかりなのかと思ったが、まれには白文字も見かけたから、赤しか使えないというわけではないのだろう、要は「中国人は赤が好き」と自分の中ではまとめることにした。

北京市内観光で天壇公園に。今回のツアー参加者に植物に詳しい方が多いのに驚いた。私の周囲には、理系でも理工系の人が多いのかも知れない。新鮮だった。

見かける木々の背が低い。国内と同種に見える木でも一回り背が低い気がした。北京の年間降水量は900mmほどとか。大阪の2/3弱ぐらいになるのだろうか。背が低いのは降水量と関係があるのだろうか。

北京市内をバスで移動する間に、車窓からポルシェやベンツのスポーツタイプといった「ごつい車」も見かけた。金持ちは本当にお金を持っているのだなぁと思った。貧富の差の大きさが感じられる。

大同市内でも北京でも、あまり古い車は見なかったと思う。10 年選手の車は無いように見受けられたから、10年前は市民レベルでは車を買える豊かさが無かったか、日本のように10年経たずに買い換えるからなのか、その両方なのか、その理由は分からない。

北京から大同市（霊丘）への移動は寝台列車で、3段寝台だった。日本の昔のブルートレインと同じ。学生時代にブルートレインに乗りたくてわざわざ『銀河（大阪～東京の寝台列車）』に乗ったのを思い出す。日本と違うのは、車端に給湯器が設置されていてお湯がもらえることと、あちこちがボロいこと。特に車体の外側。さびが浮いていたり、雨垂れの跡が残ったままだったり。メンテナンスに手間をかけていないのだろうか。これも中国式？ 中国版新幹線（つまり新型の新車）は綺麗に見えるのだけど。

列車は遅い。そして長時間走る。24 時間以上走るのもあるようだ。うたた寝をしてしまい、ふと気づくと山岳地域を走っていた。その沿線で見かける畑はずっとトウモロコシ畑。国土の広さも、農作物も、列車という交通機関についての感覚自体も、国内と全然違う。乗った列車は何でも関羽の生まれ故郷へ行くそうで、車内にもその説明が掲げてあった（が、全然読めない…）。

霊丘駅に着いたら、真っ暗なのにビックリ。駅員さんが足元を懐中電灯で照らしてくれたから良かったものの、文字通りに真っ暗なので懐中電灯なしにはホームは歩けない。予想してなかったので懐中電灯はカバンの奥底。これは失敗。懐中電灯は、初日からすぐ手に取れるところにしまっておくべきだった。初めての町に夜に着くのは、独特の不安とドキドキがある。翌朝見る町の風景はどんなものだろう。

朝になり、ホテルの周囲を見渡すと、あるある、建てかけのマンションやらできあがっているビルやらが沢山。でも、霊丘にそんなに人が住んでいるのか？？　と疑問に思った。

その後も、あちこちバスで移動する道すがら、建てかけ中のビル・マンション・団地？等々を沢山見たが、住んでいる気配がないものや建てかけが多かった。これが世に言う中国不動産バブルってヤツですね、と変に感心してしまった。

2日目は霊丘県南天門自然植物園見学だった。現地に行くまでバスを降りてからしばらく歩く。周辺にはトウモロコシ畑がたくさんあった。降水量が少ない地域だからトウモロコシなんだと簡単に勝手に納得していたが、ことはそう簡単ではないようで、地域ごとに指定作物があるとのこと。日本の食管法で米が優遇されているような感じらしい。

黄土高原の黄土に触るのは始めて。砂の粒が小さくきめが細かい。なるほど、海を渡れるわけだ。

植物園の管理棟付近はまさに「森」。ここだけ見たら日本の山林とまったく変わらない。森の中

では、キノコが生え、わき水があり、ヤモリ？がちょろちょろと走っていた。ここしか見なかったら緑化の必要を言われても信じられないだろう。管理棟内に飾られていた 99 年の周囲の写真（はげ山状態）とのギャップに驚いた。

ここの成功を踏まえて 1,000ha 規模の緑化プロジェクトが国家主導で複数行われると聞いた。人々が諦めていたことをやってのけ、国家プロジェクトを引っ張り出すほど人々をやる気にさせたのは凄いことだと思う。

で、やるのが 1,000ha 規模の緑化。1,000ha って、およそ縦横 3.2 km 弱の正方形。1 辺歩くと 40～50 分かかる長さ（平地の場合）。それを複数同時に…。中国の広さは驚異的です。

5 日目に訪れた采涼山地球環境林も広かったが、それでも 230ha という。230ha の土地に、1 ha あたり 3,300 本、合計 76 万本ほどのマツを植えて森を作った、そんな話だけでも広さが捉えきれない（ぐるり一周，マツの森…）というのに、1,000ha っていったらその 4 倍以上です。とにかく大きさの感覚が全然違う…。大陸ってこういう世界なんだな、と再確認した次第です。

途中、バスの車窓からメガソーラーを見かけた。30 メガワットの発電能力があるとのこと。本当に“メガ”な設備。30 メガワットと言われて大きさが分かるとは思えない。その土地には、他に設置できるものがない（水不足等で農地に向かない、工場用地にするには地盤が脆弱、よって使い道がない）ので、メガソーラーを設置するのだとか。確かに周囲はただの空き地。ずーーーっと空き地です。

アンズの村に行く途中で見た変電所もちょっと不思議。何もない土地に、突然大きな変電所があらわれた、という感じで建っている。周囲に町も村も見えないのに…。一体どこへ変圧後の電気を送るのだろう？？　という立地なのです。

何かにつけて、日本とスケールが違いすぎます。

万里の長城も連れて行ってもらいました。版築で築いた長城なので写真でよく見るレンガ積みのものとは違いますが、尾根線に沿ってうねうねとあるのは同じ。登ったらえらく高く、周囲が存分に見渡せます。広い広い土地が見渡せます。周囲が山なので地形的には盆地なのですが、広さが尋常ではありません。大陸は広いです。大きな木がなく、ビルはもちろん、2 階 3 階建ての建物もないので、高さがまったく分かりません。バスが小さく見えるので相当高いところまで登ったのは確かだと思います。ハトか何かの群れが目線より下を飛んでいったのに感動しました。そんな高さまで行っても、長城はまだまだ上へ続いている…。

超高圧送電線が、日本より低いように思う。周囲に高さを比較できるものが少ないためにそう思うのでしょうか。ガイシの数が多いので相当の高電圧のはずなのですが。緑化センターの敷地内にも高圧送電線の鉄塔が立っていましたが、その下に立つとジリジリバチバチという高圧送電線独特の音がきちんと？聞こえたので、高電圧なのは間違いないです。

気温は思ったより高かった。日本の秋にあわせて持っていったので要らないものが多数。前半の日程は大阪と同じくらい暑かった。後半は、昼間はＴシャツ 1 枚で十分なくらいの暑さ、朝はその上に 2 枚ほど着ないと肌寒かった。寒暖の差を実感。

水筒は大きなものを持っていったが、結果として不要だった。ペットボトルの水を用意していただいていたので、それで事足りました。が、水不足の地域に来ているのに、そんなに簡単に水をもらって良いのだろうかと内心悩んでしまいました。

水は人にもよるだろうけど、私は 1 日にペットボトル 2 本で足りた。前日のうちに沸かした水を冷ましたものを、前日に空いたペットボトルに詰めて持っていくようにしましたが、これで水 1 本は確保できます。その他に、バスに乗るときとかに新しいペットボトルをもらうようにしたら十分でした。歩き回るときに持つカバン（背負うザック等）には、ペットボトルが 2 本入ると良いと思います。慣れている方は、ポケットの多いベストを羽織っていて、そのポケットにあれこれ入れていました。僕も自宅にはその手のベストがあるので、持っていけば良かったと思いました。

とにかく、両手が空いた状態で歩き回れるようにしておくのが良いです。

他に、目覚まし時計は持っていくべきだったと思いました。ホテルに目覚まし時計がないのです。また、衣類は途中で洗うのを前提にしておくと荷物が減って軽くなり便利です。夕食前に軽く洗っ

ておくと、翌朝には大体乾きます。もちろん、乾きやすいものを持って行くに越したことはありません。

Ｕ．Ｔ．さんはこの方針を徹底してらしたので、荷物がとても少なかったです。多い人はＵさんの３倍以上あったのではないでしょうか。駅での移動は、自分の荷物を持って階段を上り下りし、しかもものすごい人混みの中を掻き分けていくので、荷物は小さい方が絶対に良いです。誰かがへばったときに荷物運びを手伝えるくらいの余裕があると最高です。

雨具は大同では使いませんでした。使ったのは帰国直後。関空に着いたら関西はしっかり雨。雨具は国内対策で持っていくのが良い？

４日目、ホテルに着くとＩ．Ｓ．さんが「パスポートがない！」ポケットに入れていたそうですが、すられるようなところには行っていないはずなので、どこかで落とされたのだと思います。ともかく、中国では、飛行機に乗るのはもちろん、列車に乗るのもホテルに泊まるのもパスポートが必要なので大変なことになりました。高見さんが手を尽くしてくれて、翌日には紛失照明を発行してもらえた（これは相当に素早い対応だそうです。ここでも高見さんの人間関係が効いているとのこと）ので、無事帰国は出来ることになりました。しかし、ここから先は別行動を取らざるを得なくなり、北京でしばらく足止めをくい帰国は早くても９月２日になる（予定より５日遅れ）という話でした。もっと帰国が遅くなっても仕方なかったそうです。パスポートを紛失すると大変なことになると見せつけられた感じでした。やはり、パスポートは首から提げるか、腹巻きに入れておくかが安全です。

３日目の晩は、天鎮県の温泉ホテルに宿泊。割り振られた部屋へ入ると窓が開いたまま。ほう、風を通して換気しておくというサービスかな、と思ったらとんでもない、単に壊れているだけ。窓をロックする金具が壊れていて閉じることができないだけだった。部屋は２階、窓の前は木、窓についた網戸は簡単に開く作り。こりゃ泥棒さんいらっしゃいってことじゃないか！　アカン！　と言うことで部屋を変えてもらうことにした。が、移動先の部屋を教えてもらうために待っている間に、ねじ回しと小さな部品を持った兄ちゃんがやって来て、ちょちょいと部品交換、「もう締めれるようになったから大丈夫」　え？！　そんなもんなん？　そんなんで済むロック機構で大丈夫なん？　と心配になると同時に、そのくらい簡単な作業なら客が来る前に修理しておけよと腹が立つやら。これも中国流か。文句は言わないとダメですねぇ。

夜、星空が綺麗だったのがこのホテルで一番良いところだったと言ったら可哀相かも知れない。星は蠍座が見えたのがうれしかった。なかなか南天の蠍座は見られないので。しかし、大同市って日本だったら高緯度地方に相当するはずなのでは？ なぜ南天の蠍座が見えやすいのだろう？？緯度を間違えて認識しているのかな？？？

中国、それも今回行った北側の地方は、相当の水不足と聞きます。川はあっちこっち干上がっていて流れがないところも多い、いや流れがある川が少ないです。植樹したところも水不足で枯れるかもと言うくらいの水不足。

その割に、無頓着に水を使っているように見えます。ホースの流し水で車を洗うのは、そうとうに贅沢な水の使い方だと思うのですが。初期の頃の話を聞くと、たらい１盃の水が数人分の１日の水だったとかいう話が出てくるので、水の使い方が贅沢なのが信じがたかった。信号を守ろうというマナーアップキャンペーン CM より、水を大切に使おうというキャンペーンコマーシャルの方が先なのじゃないか、と思いました。

色々と体験をさせてもらい、見せてもらい、楽しかったです。

元々のイメージでは、もっと「ワーキング」だと思っていましたが、記念植樹をした程度で（なにしろ、作業時間より現場まで歩いて行く時間の方が長かった）、相当に観光させてもらったと思います。観光のつもりで行っていたら移動時間の長さやホテルの設備などに不満も出たかも知れませんが、土まみれになるつもりで行ったので不満はなく、逆に楽させてもらって観光させてもらって、これで良かったのか知らん、という感じです。

とはいえ、万人坑などは観光ツアーでは入れないかも知れず、戦時の傷から現在の中国のかかえる矛盾や落差、観光では分からない現代中国のエネルギーも垣間見ることができた盛りだくさん、

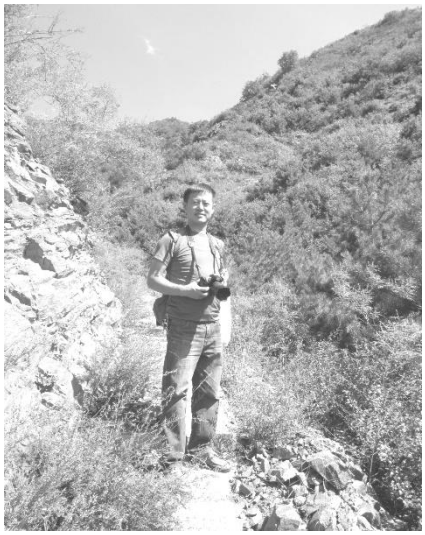
感じるところの多かったツアーだと思います。
　なかなか行けませんが、何年かしたらもう一回参加して、中国という国がどう変わったのか見てみたいと思いました。

○8 月 29 日（金）晴れ

【河本公子記】
　昨夜 10 時 24 分に大同を出発した夜行列車に揺られて北京駅に到着。予定では 4 時 30 分到着のはずが、5 時すぎにやっと到着。夜行列車では「絶対に寝過してはいけない」というプレッシャーからかほとんど眠れず、睡眠不足で体に力が入らないのでこうやってペンを握って日誌を書いていても字がくねくねしています。
　目が半分閉じた状態でサウナへ。昨日までの大同と違い、北京の空はかすんでいました。30 分ほどでサウナに到着。早朝なのでお風呂はほぼ貸切状態。服務員の女の子も眠たそう。お風呂でさっぱりしたあとはここのサウナではみんな寝巻きのような服に着替えなければならず、みんな同じ服を着てうろうろしているので誰が誰だかわかりにくいです。
　サウナのあとは 8 時半出発で首都博物館へ。館内に日本語のパンフレットがあったので見ていましたが、日本語教師をしていたときの習慣が抜けず、文法、誤字などのあらさがしをしてしまい、なぜこういう間違いがおきるのか、どうやって間違いに気づかせようか、などとついつい考えてしまいます。
　首都博物館を出て空港へと向かいましたが、道が混雑していてはらはら。通訳の王さんいわく火曜日と金曜日は特に道の混雑が激しいとのこと。「はやく進め～」と念を送りつつ、のろのろスピードでしたがなんとかバスは進み、11 時 35 分に空港に到着。ANA のカウンターでチェックイン。関空と違ってパスポートを提示するだけでよいので楽ちんでした。
　チェックインのあと、O．M．さんとコーヒーショップに入り一服。やたらとカップが大きかったので半分も飲めませんでしたが、ひさびさのコーヒーの香りを楽しみました。Oさんの頼んだ紅茶が、どこか中国っぽい香りがするのはなぜ？　と思っていたら、わざわざ菊の花が入っていたので驚きました。紅茶と菊花のブレンドは正直あまり合いません。
　今回のツアーでは、日本からわざわざお抹茶セットを持参してみんなにお茶をふるまっていたY．H．さんや、折り紙でかわいいパンダの指人形を作ってくれたO．M．さんなどを見て、「こういう交流方法もあるんだ！」と、たくさんの発見とヒントを得た気がしました。
　また、Kさんがツアー中体調を崩してしまったのは、もしかして毎夜わたしがアイスを食べさせたせいでは……と反省しています。はやくよくなってください。そして今回で 20 回目のツアー参加のＩ．K．さんのスピーチもとても感慨深く聞かせていただきました。みなさん本当にどうもありがとうございました。

【Ｉ．Ｋ．記】
　今年も北京で前泊・後泊して参加した。若し来年も参加したら関空で前泊・北京で後泊を計画しよう。1 日を有効に使うため！！
費用　GEN に支払い 10 万弱＋王黎傑への支払い 11.5 万＋北京往復運賃 6.3 万円（北京雑技を王さんと 500 元での観劇こみ。レート 1 万円＝530 元と最低）
8 月 22 日（金）
　福岡空港 CA15：10～16：10 大連入国 17：10～18：30 北京着　博達万源公宮泊。バスは無いがまずまず。ホテルで夕食。王黎傑と。冷えたビールはない。
8 月 23 日（土）
　ホテル発 10：30～11：30 中国国家博物館参観。参観料が無料となった関係もあり長蛇の列。傷害者手帳で団体の列に紛れ込み入場する。目的の雲南から発掘された、志賀島の金印と同型の金印

に前漢時代の展示室で対面した。同形・同寸で志賀の島で発見された物が本物と証明された由だが、古代史の会の北村先生の話を聞いてない人は理解困難。13：30～近くのホテルの 3 階で香港料理の昼食は飲茶。地下のスーパーで缶ビールと白酒の小瓶を仕入れ、列車の 5 時間の旅に備える。列車は硬臥車の 3 段ベッドの 6 人部屋、どなたと一緒だったか覚えてないがビールで乾杯した。
16：00 北京駅北口で本隊と合流。夕食は加熱型牛丼。初めて 3 段ベッドに上ってみたが昇降は怖い。
22：05 霊丘県着昨年と同じ明珠国際商務酒店泊り。温泉@25 元を 10 元値切る。京都のＩ．Ｋ．さんと同室したがあまり話はしなかった。
8 月 24 日（日）
午前中・南天門植物園作業、午後・登山私は登頂を目指したが渋滞で管理棟 10：30 発となり、完登できず。
11：10～12：10 水平道直下、山川さんが追いつく。
15：15 管理棟着。来年、再挑戦したい。明珠国際商務酒店連泊
8 月 25 日（月）
懸空寺参詣・呉城村昼食～村内観光、天鎮県温泉商務賓館泊り。昼食は 3 班に分かれる。村長宅の居間に上がらず土間で現地の若者の接待を受けたが、話が通ぜず残念だった。大阪のＹ．Ｔ．さんと同室。なんと福岡県残留婦人の会の　　さんたちとモンゴルへ同行したことがあると聞き、奇遇に驚く。
8 月 26 日（火）
張西河郷で植林・午後・李二口長城参観・大同雁西賓館泊り。活動現場は遠いとて跡を追うが脇道に入ったらしく見失い、私は山頂を目指し往復 2 時間散策する。Ｙ．Ｈ．さんが追いつく。張西河郷委員会で昼食、トイレに行くのがやっとで飲み過ぎたかと思った。長城は守口堡と勘違いしてパス。残念だった。
8 月 27 日（水）
午前・環境センターでマツの移植、腰の悪い私は一本も移植できず、見守りのみ。午後は采涼山～カササギの森を駆け足で参観。市内でシャブシャブの宴会。
8 月 28 日（木）
雲崗石窟と万人坑～スーパーで買い物。私は OP で白登山～カササギの森を散策。夜半の雨でカササギの森は無理と言われたが、場合によっては歩くと要望し予定通り出発。ガイドは奇しくも 95 年の王萍。白登山は歴史的に有名で眺めもよい。カササギの森はほとんど雨は降らなかったようで管理棟まで入れたが、雷が鳴り雲行きが怪しい、急ぎ足で活動現場の状況を観察する。何処も苦労が実っており感激だ。Ｙ．Ｈ．さんから同行を求められ、一部を案内する。(車代 900 元+ガイド料 600 元)



18 時 30 分からの歓送会に挨拶を指名され、なぜ 20 回もつづけたか、95 年 3 月の初訪問時、過酷な自然条件のもとで、目をキラキラさせて健気に生きている村人に感動した。歓送会の白酒にも魅せられたと挨拶した。夜行寝台で北京へ。
8 月 29 日（金）
4 時コール、5 時過ぎ北京黄林駅着。早朝のサウナは落ち着かず朝食のバイキングも不味い。西安交通大学に留学中のM．O．君と共に本隊と別れる。ホテルで 2 人で昼食、農家焼飯は旨かったが半分も食べれない。
13：15 前夜からパスポート再発行手続きのため北京に来ていたＩ．Ｓ．さんと、市内の旧天文台と改装後の大散欄を散策。本を探すというＩさんと別れ、北京雑技 480 元×2 人を王さんと約 1 時間観劇する。上海の曲技団とは雲

泥の開きがあった。ホテルに戻り、近くのレストランでＩ氏の慰労会、うまかったし話が弾んで有効な夕食だった。合計 480 元。200 元奮発。王さんのご主人がホテルまで送ってくれた。
8 月 30 日（土）晴れ
　05：30 楊運転手の車で国際空港へ（チップ 50 元）CA　08：50 が 30 分遅れ大連での乗換 1 時間待ち。16 時、藤崎へ娘に迎えて貰い帰宅。夕食は下宿に帰る孫の歓送会、新学期の始まり、各 2 千円小遣い。

白登山：紀元前 200 年、韓の高祖劉邦が勢いに乗って匈奴も討とうとしたが、冒頓単于の策略で大敗をした歴史上有名な「白登山の戦い」の古戦場。山頂までドライブウエーが続いており、注意しないと通り過ぎそうだ。環境林センターから高感度の望遠鏡で眺めたら、山頂の記念碑が見えるのではと思った。

中国国家博物館：天安門の東側にある旧歴史博物館が改装・増築されており、現在、入場料無料とて見学者は長蛇の列。生半可では入場出来そうにない。私は障害者手帳で優先入場した。
　目的は、福岡の志賀島で発見された国宝「金印」と同型同寸の金印が雲南省でも発見され、日本の物も本物といわれた実物と、河南省で発掘された佐賀県吉野ケ里環状集落と、同形の模型を見ることにあった。

【Ｉ．Ｓ．記】
黄土高原緑化ツアーに参加して
　はじめに、植樹ツアー中にパスポートを紛失し、高見事務局長、魏副所長、王萍さん、张永生さんはじめ皆様にご心配をお掛けし、また私の帰国を可能にする為のご尽力を賜り、お詫びと感謝を申し上げる。お陰様で私は 9 月 2 日に帰国することができた。
　さて、この植樹ツアーを通じて感じたことを述べる。まず感動したことは緑化がかなりのレベルまで進んでいることです。ツアー参加前に、BS 朝日作成のビデオを見たが、緑無き黄土高原のイメージ（撮影された時期が冬場）が私の頭に残っており、一層緑化が進んでいる印象を強くしたかもしれません。更にこの緑化を後押ししている NPO 緑の地球ネットワーク、カウンターパート、地域住民、地元政府の間の緊密な連携があると考える。私は緑化と言えば、植林のみを考えていたが、それ以外にも重要なことがあることが分かった。地元住民の生活（経済作物である杏子等を通して収入改善）を考慮し、住民の意識の向上（伐採禁止、放牧禁止）、現地での技術蓄積（植林センター、南天門自然植物園）を図り、植樹した後に樹木の成長状況及び植生回復状況のフォローだ。しかも中長期スパン（南天門自然植物園の 99 年の使用権）でもこの問題を捉えている。これが今回のツアーの大きな成果だ。私がこのツアーの前に参加した内モンゴルオルドス市の恩格貝では①緑化②地域起こしには成功しているものの、地域住民の参画が不足していると感じた。二つのツアーに参加して、物事が多角的に見えるようになった。
　最後に私は 9 月 9 日愛知大学スポンサーの地元ラジオ局番組“チャイナ・なう”の収録に出演し、緑の地球ネットワークのご紹介をさせて頂きました。9 月 14 日（日）放送予定で、その内容は以下の通りです。
　『この地域（大同市）で緑化が成功している理由は二つです。一つは経済作物であるアンズを植えることにより地域住民の収入を 10 倍（1 万元）以上にし、貧困問題を解決し、結果として緑化を促したことです。貧困であるうちはとても環境問題なんて考えられない。この問題は地域住民と密接な関係にある訳です。もうひとつは NPO、住民、地元政府が緑化という目標に向かって相互協力し、努力していることです。地域住民の生活が向上し、伐採禁止、放牧禁止規則を順守するようになり、植生が回復し、植林効果が増大するという好循環を生み出している。』

【高見邦雄記】

パスポート事故顛末

ツアー参加者のみなさんがご存じのように、大同でパスポート事故が発生しました。これまでもパスポートを落としたり、忘れたりといったことが何回かあったのですが、その都度、奇跡のような経緯をへて、持ち主のところに戻ってきたのです。今回のＩさんは返ってきませんでした。

今後に活かすために、発生後の顛末を書き残しておきたいと思います。

【大同でやったこと】

なくなっていることがわかったのは８月 26 日の夜でした。ホテル宿泊にパスポートが必要ですが、ありませんでした。どこでなくしたか、本人に自覚があることはまずないでしょう。わかっているくらいなら、なくなりはしません。

通訳を派遣してくれている北京同心社の張永生さんに電話連絡をとりました。彼は以前、北京でパスポートをなくした人のために奔走し、帰国予定日の翌日に送り出した経験をもっています。そのときの電話では彼もまだ楽観的だったのです。

いずれにしろパスポートに代わる「帰国のための渡航書」を北京の日本大使館で発行してもらう必要がありますので、日本大使館のホームページを閲覧し、あわせて知り合いの大使館員を通じて領事部の人を紹介してもらいました。スムーズに発行してもらえるよう頼んでおいたのです。

すべてに先立って、地元の公安派出所の事案発生証明をもらい、さらに大同市の公安局で「護照報失証明」を得る必要があるということです。さっそくその準備に入りました。27 日のお昼には天鎮県総工会の主席が天鎮県の公安の証明書を緑の地球環境センターに届けてくれました。

大同市公安局には本人が出向く必要があり、Ｉさんと魏生学副所長が 27 日午後、そちらに向かいました。途中、何度か連絡がきて、思ったよりたいへんだというのです。大同市公安局から山西省公安庁に報告をあげ、山西省公安庁は外交部に報告をあげ、外交部が本人の入国を確認して、その逆の順序で大同市公安局に連絡がきて、はじめてその証明書が発行されるのだそう。最低でも 6 時間かかるというのです。魏生学副所長は彼の人脈を使い、なんとかこの日のうちにその証明をとるのに成功しました。そして、その晩の夜行列車でＩさんを北京に送り出したのです。

【北京で進行したこと】

私は北京に連絡して、日本大使館近くのホテルの予約を頼みました。列車や飛行機に乗るにも、ホテルに泊まるにも、ふつうならパスポートが必要ですが、「護照報失証明書」がその代わりを果たします。

ずっと以前のことですが、政府が国民全員を対象に発行する「身分証明書」は日本にはないと私が話すと、魏生学副所長は「それでどうやって生活できるのだ」と応えたことがあります。私はそのときのやり取りを思い出していました。

28 日の朝早く北京に着いたＩさんは日本大使館領事部に行きました。そこでまず「紛失一般旅券等届出書」を提出しますが、それには先の「護照報失証明書」、写真１枚、身元確認書類が必要です。そのあと「帰国のための渡航書」を申請することになり、発給申請書（窓口に用紙）、写真１枚（つごう２枚）、日本国籍を証明するもの（運転免許証、戸籍抄本など）、手数料 160 元が必要です。渡航書は原則として即日発給されます。

問題はその後です。大使館のホームページには「公安局出入境管理処で『滞在査証』の申請をしましょう（北京においては一般的な手続きに申請日を入れて８業務日かかります）…」とさらりと書かれていますが、ええーっ！　８業務日ですよ！

大使館領事部のＮさんに電話で問い合わせると、「普通は１週間ですが、緊急の用事などがあるばあいは短縮されることもあるようです」とのこと。

張永生さんが公安に電話で問い合わせたところ、電話ではらちがあかなかったそうで、直接公安局にでかけて話を聞いてくれていました。公安局での査証申請には、帰国のための渡航書のほか、臨時宿泊登記書が必要だそう。どこかのホテルに泊まり、その証明をとるわけです。そして「最終的には３作業日を覚悟しないといけないようです」と電話で私に告げました。

張永生さんに付き添われて、Ｉさんは北京市の公安局に出向きました。途中、何度か張さんが私

に電話をくれました。窓口ではやはり「最低でも 3 作業日が必要だ」と言っていますが、短縮できないか、午後から上の人と交渉してみますとのこと。彼はずいぶんと粘ってくれたようですが、それ以上は短縮できませんでした。土日が入っていましたので、9 月 2 日（火）午前 9 時に公安局の窓口で査証を受けとることになったのです。

引き続き、帰国便の変更手続に張さんが回ってくれました。幸いだったのは、そのチケットが 300 元の手数料で期日の変更ができたことです。団体旅行のチケットは安いかわりに変更できないことが多いのです。そうなると、手持ちのチケットを破棄し、新しく購入するしかなく、これがけっこうな出費になります。

【振り返ってみて】

１．これまでにパスポートを落としたり、忘れたりした人の大部分は、海外旅行の経験が豊富な、ベテランの人たちでした。今回もそう。

２．パスポート事故が発生すると、それ以後の旅程はずたずたになり、時間も費用もかかります。本人もたいへんですが、周囲の人たちに迷惑をかけます。たとえば今回も、雁北賓館の人たちは「パスポートのない人間をなぜ泊めたか！」といって叱られたよう。

３．8 月 29 日の帰国予定が 9 月 2 日まで 4 日も延びました。

みなさん、パスポートはくれぐれもたいせつに！

学習院大学・立教大学参加者名簿

U．M.	東京都	立教大学教員	O．T．	東京都	立教大学学生
I．C．	神奈川県	立教大学学生	O．N．	東京都	立教大学学生
K．T．	東京都	立教大学教員	K．A．	東京都	立教大学教員
Y．M.	東京都	学習院大学学生	K．T．	神奈川県	学習院大学学生
H．R．	東京都	学習院大学学生	K．E．	東京都	学習院大学教員
R．T．	千葉県	学習院大学学生			

学習院大学・立教大学参加者感想

【K．T．（立教大学）】

緑の大同に、先人の努力を想う

8月23日から29日まで、GENおよび立教大学の授業「フィールドワーク」のメンバーとともに、大同での植林等の作業に参加した。

筆者にとって初めての黄土高原は、拍子抜けするくらい緑に満ちていた。野山には草が茂り、アンズ園やトウモロコシ畑が広大な高原に果てしなく続く。これに羊飼いやロバの姿が重なると、何も知らずに初めて訪れた者は、豊かな大自然という言葉を想像するであろう。

しかし、20 年ほど前のこの地の写真を見て、私はあまりに異なる姿に大変な衝撃を受けた。見渡す限りの荒れたはげ山から、緑化事業は始まったのだ。乾いた大地にはじかれながらスコップを力一杯さし込み続けて大きな穴を掘り、小さな弱々しい苗を丁寧に両手で植え、土をかぶせてからバケツに一杯の水をふんだんに与える…一本を植えるだけの作業も、水も酸素も少ない高原では大変な労働であった。これをただひたすら、何千回、何万回と繰り返す…私が今目にしている緑の風景は、想像を超える地道な努力の成果であったのだ。

そんな緑化は、中国北部の各地で展開されているのであろう。今回観光で訪れた雲崗の石窟や、北京の市街では、一昔前とは比べものにならないほど美しく緑化が進んでいた。荒涼とした風景に暮らす華北の人々にとって、緑の中で暮らしたいという願いがいかに強いかを、至る所で感じさせられた。北陸で5年を過ごし、雪にとざされたモノクロの景色を見慣れた私には、黄土高原の人々が「冬でも緑が欲しい」と、マツの植樹を望んだ気持ちは非常によく分かる。それとともに、それに応えようと多くの人々が積み重ねたGENの努力にも思いを馳せた。

私が植えたわずかな苗木達は、立派に育つであろうか。必ず機会を見つけてまた訪ねてみたいと思った。

【K．E．（学習院大学）】

青い空と草木・野花で彩られた丘陵地。これが今回の大同の印象だ。前回大同に来たのは十年ほど前であり、当時は市内しか見ていない。今回は5日間に大同市所管の県の鎮や村を見て回ったため、様々な映像がコラージュされ、上記のような印象が映像となって残っている。今回活動に参加して、緑の地球ネットワーク（GEN）の20年の活動は着実に成果を上げ、社会活動の様々な実践上の実例を提示していると実感した。

実は数年前から高見氏の一連の著作を拝見し、授業では黄土高原の歴史と環境について話しているので、訪問した植物園や村々のこれまでの歩みと苦労については文章の上では知っていた。またこの事業に関わる武春珍女史ら中国側主要メンバーについても同様である。だから今回の大同訪問

は、慣れ親しんだ物語の舞台を訪れて奇妙な再開を果たしたかのようだ。
　初日は霊丘県のホテルに宿泊した。霊丘県は太行山脈の麓にあり、ホテルはからも良く見え、近くの山を地元の人は「太白山」と呼んでいる。GEN の高見氏の説明では、この県はもともと大同市で一二を争う貧困県だったが、地下資源の高騰で豊かになったと言う。だが環境破壊が激しく、山を開鑿して地下資源を取り、沢には掘られた残りを捨てて表面を馴らす、ということが行われ、土砂災害を起こしていると言う。隣りの陝西省の黄土高原でも実は同様で、地下資源の開鑿によって地下水が汚染されていると聞いたことがあり、また成金を生むことで、生態環境の乏しい厳しい社会にさらに負荷を与え、複雑でいびつな状況を生み出しているようだ。
　水の問題は深刻で難しい問題である。今回土手を歩きながら、高見氏に井戸の掘削について話を伺った。御著書の中では山西省独特の盆地の地形における水事情が詳細なデータと共に説明されている。標高の低い村では地下水位が高く経済的に豊かである。一方、標高の高い村では地下水位が低く水が乏しいため、また、下の村が灌漑農業を行い水が奪われてしまうため、ますます水が枯渇し、ひいては下の村から水を買うという状況である。上の村の女性たちは結納金が安くても豊かな下の村に嫁ぎ、上の村の男性はなかなか結婚相手を探せず、結納金も高い。井戸の掘削成功は村の存続に不可欠だが、水収支は変わらないので、それが総体的に見てどうなのかは難しい判断である。高見氏によれば、GEN では 2008 年に井戸を掘ったのが最後だという。その村は山西省唯一の水の無い村だったそうで、専門家も成功を危ぶんでいたと言う。掘削二度目で成功した後、この村では養豚ができるようになった。また、逆に下の村の井戸が枯渇し、上の村に水をもらいに来ていると言う。
　水が無くなるということは、そこに村が存続することは不可能であり、生態移民という形で村人が移住し、一つの村が消えることを意味している。高見氏はこのことで友人から「余計なことをしなければ、緑が復活したのに」というような趣旨の皮肉を言われたそうである。実際、黄土高原の植生の乏しい場所でも、人がいなくなった途端に緑は息を吹き返す。ここでは明らかに人間は余計なものなのだ。しかし、黄土高原の村々はどれも古い歴史を持つ。古い伝承や神話を持つ村が消えてしまうのはあまりにも悲しい。豊かな植生の復活と人々の生活の営み、この二つのバランスをとる方法は必ずあるはずであり、その模する試みに私も参加したいと強く思った。

【H．R．（学習院大学）】
　私は山西省を訪れたのは初めてです。北京と西安以外は、北部の都市を訪れたことはありません。体験したことのない乾燥した空気（朝起きると喉が痛くて顔が突っ張る感覚）と、一面に広がる黄色い大地、そこに張りつくように育つ草木の光景はかなり印象の強いものがありました。
　西安調査でも、陵墓周辺で栽培されるトウモロコシや、リンゴ・ブドウ・ザクロなどの果樹を見ていたので、従来栽培されてきた植物や近年栽培されるようになった植物について薄ら確認することはできていたのですが、先生がたの細かな説明で、土壌の特長や乾燥地で育つ様ざまな植物について知ることができたのは大変大きな収穫でした。教科書などで、華北は小麦・雑穀、華南は米作と簡単に書かれていますが、今回のツアーで初めて、その理由や特徴を知ることができました。実際に、その地で採れたものを口にできたのも良い経験でした。
　とくに、黍、トウモロコシは日本では食べられない種類のものでしたので味を知ることができて嬉しかったです。とりわけ、この数年は江南地域を訪れることが多かったので、気候や植物、食べ物や村の構造・建築様式の違いなどについても興味深く観察いたしました。
　ツアーということで、かなり優遇された立場から地域を見ていたとは思いますが、それでも黄土高原で生きることの厳しさと生き物が持つエネルギーを感じる一助になったように思います。
　先生が、大同は要地であるということを繰り返されていたのも、時代を通じて都市と都市の関係を広く見る必要性に気づくきっかけとなりました。研究上、開封や杭州など、国都（中心）の視点から時代を見てしまいがちなのですが、周辺都市、あるいはさらに離れた地域からの視点も忘れないようにしたいと思います。

万人坑も心に残る場所でした。1つの歴史的事実として受け止めることだけでなく、その事実をどのような形で伝えていくべきか、研究や展示方法についても深く再考する必要を感じました。またここでも大同という地域の重要性、特徴を学んだように思います。

とりとめのない感想ばかりですが、もう少し整理して、今後の研究にも活かしていきたいと思っております。

【K．A．（立教大学）】

大同・北京フィールドワークに参加して

今回のフィールドワークに参加し、とても貴重な経験をさせて頂いたと思います。私自身の研究のフィールドは江南や華南で、これまで農村地域に行くこともありましたが、「水」の問題を今回ほど認識させられたことはありませんでした。首都北京を含む華北の水の問題の深刻さの一端も知ることができたように思います。華北特有の自然環境や生態を目の当たりにし、また、その土壌に根ざした歴史のあり方を知る、という体験ができたことで、今後自分のフィールドの歴史を見る目も変わってゆくのではないかと思っています。

大同の雲崗石窟は1998年に旅行で訪れたことがあったので、その変貌ぶりに驚きました。北京もそうだったのですが、90 年代末から比べると、格段に「緑化」が進んでいます。ただ、観光地や都市部の「緑化」は、例えばGENの方がたが進めているような、生態系や人びとの暮らしを視野に入れたものとは少し意味合いが違うようにも思います。GEN のツアーで山間部を見てきた後で都市の様子を見ると、都市の美観としての「緑化」のために水源である山間部の水が枯渇していくのではないか、という懸念を持たずにはいられませんでした。

また私自身の関心に引きつけて言えば、農村（お昼をいただいた村）、近郊都市（大同県および大同市街）、大都市（北京）のそれぞれでキリスト教の信徒の家や教会を目にし、興味を引かれました。特に農村のキリスト教の状況がどのようなものなのか、村全体の中での彼らの位置づけなども含めて聞き取りなどができたら良かったなと、少し心残りです。

有意義で楽しい9日間を過ごさせて頂きました。また機会があったら、その後の大同を確かめに行きたいと思います。

【K．T．（学習院大学）】

去る2014年8月23日から29日にかけて、緑の地球ネットワーク（GEN）主催の黄土高原緑化活動に参加した。GEN の活動に参加して最も印象に残ったこととして、参加者の大部分を占める年配の方々が実にエネルギッシュに活動されている姿がある。活動の初日から山の斜面での植林活動に汗を流し、簡単な昼食後には足取りも軽く登山へ向かう。この姿からは、参加者が自分達の植林した場所への愛着を持ち、楽しんで活動していることが感じられた。バスの移動中には GEN の成り立ちについて、多くの苦労話をまじえご紹介いただいた。中国という難しい面を持つ国でこうした活動を軌道に乗せるまでの過程を考えると、GEN の現在の順調な活動や成し遂げられてきた成果に驚きと敬意を禁じえない。今回、縁あって活動に参加させていただけたことは本当にありがたく感じている。

私は、以前に陝西省統万城での植林活動に参加した経験があり、今回の植林活動では陝西省での植林活動と果たしてどのような差異があるのかという、個人的な興味を持っての参加でもあった。統万城での活動は、大学をパートナーとして行っていたのもので、植林によって砂漠化の進行を抑え遺跡の破壊を食い止めるという、植林と遺跡保護を両立させる活動を行っていた。その時に植えられた樹木の種類は一種類か二種類だったと記憶している。これは多数の植物をその植生に応じた環境に配置して「植物園」としている GEN の活動とは大きく異なる点である。GEN の活動では植林による自然環境の再生を目的とし、統万城では植林による遺跡の保護を目的としている。統万城では樹木による防壁で遺跡の風化を抑えることが目的である以上、植生の多様性よりは根付きや

すく乾燥に強い種を植えることが優先されていたように思う。このように、同じ中国での植林活動であっても、環境・目的・資金等の条件によって活動の姿は大きく異なり、そこに地元住民との折衝や地方政府とのやりとりといった事柄も加わってくる。GEN と統万城での植林活動を通じて感じたのは、それぞれの土地の環境や人間関係によって活動の中身も大きく変わってくるということである。私は、NGO によるボランティア活動であれば、折衝や軋轢は比較的少ないなかで活動できると思い込んでいたが、その認識も改める必要があると感じた。今後、他の地方での植林活動の方法や目的についても、どのような特徴があるのか調べてみたい。

【Y．M．（学習院大学）】

今回、初めて中国での緑化活動に参加した。中国では政治家の能力が大きく影響するようである。それはバスの中から見た各地の植林状況と大同市の観光開発の様相から知ることが出来た。ガイドさんの説明によると 2000 年初頭の大旱魃を受け、各行政機関ではノルマを抱えて集中的に植林活動をしたという。その規模は大きく、道路沿線に見られるポプラ並木の成長ぶりからも事業が成功していることが伺われた。こうした風景を見て、もっと政府が精力的に植林をすれば、かなりの緑が戻ってくるのではないかと感じた。

一方、車内では大同市の開発についても詳しい説明を聞くことが出来た。大同市ではシャドウバンキングからの融資により多額の借金を負いながらも、道路の整備やマンションの建設を大規模に行い、かつ古都市の再現を目指しているという。なるほど、村落と市内の景色はまるで時代が 100 年変わったかのように大きく違っていた。私は自由時間に城壁の中に入ってみたが、町並みは雲南省麗江の古城を模倣したかのような印象を受けた。かつての町並みを再現しているのかもしれないが、なぜか偽物を見ている感覚がぬぐえなかった。街は賑やかとはいえず、人々の生活が城内の華美な建築とは裏腹に殆ど根付いていなかった。店の門は閉まり、観光客も少ない。まさに鬼城（ゴーストタウン）といった様相であった。

大同市はこれからも古い家屋を取り壊し、新たな町並みを作っていくのだろう。なぜ、ぼろぼろになりながらも残されている家の壁や門を生かさないのか。私にとっては古い土壁や年季の入った門のほうがずっと重要に思われた。市の方針が理解できなかった。

おそらく中国では市長の権限が日本とは比べ物にならないほど大きいのだろう。市長の方針一つで町並みががらりと変わることもある。市長が文物の保護に重点を置かなければ、こうした財産は見る影もなく取り壊されてしまう。市長が GDP の成長という数字にとらわれない政策を取ることができれば、中国は大きく変わっていくに違いない。ましてや緑化活動に力を入れれば、この地にどれほどの緑が戻ってくるのだろか。

今回、私たちは GEN の活動で植樹作業を行なった。政策一つで大きく変わるこの地で緑化活動をしていく意義は何だろうか。そういったことについて考えずにはいられなかった。あくまでも個人的な見解ではあるが、GEN の活動には緑化活動を通した村民と参加者の交流に特に大きな意義があるように思われた。植樹ももちろん大切である。ただ、政府の動員力とは比べ物にならないほど小規模な活動であることもまた事実である。となると、やはり日本人が戦争の傷跡深い山西省の地で植林事業をしていくことが、緑化以上に意味のある活動ではないかと思われた。私は南天門自然植物園のスタッフである周金氏と話す機会があった。聞くところによると、彼のおばあさんのお姉さんは日本軍によって殺されたらしい。女性が日本軍によって殺された。私はそのことについて詳しく聞くことができなかった。返答に困っていると、彼はこのように言った「でも今の日本人はこうして緑化に来てくれるから良い人たちだ」。

身内を殺された人びとがいるこの山西省では戦前の歴史は決して過去のものではない。こうした事実を身をもって感じた。私はこの活動がより多くの日本人に知られ、日中間の理解が深まることを願ってやまない。

この記録は、緑の地球ネットワーク 2014 年黄土高原スタディツアーに参加したみなさんがツアー中交代でつけた日誌と、一部参加者より事後に寄せられた手記をまとめたものです。一部の漢字・仮名遣いや句読点の使い方、改行の仕方、固有名詞の誤記等改めた部分もありますが、文章表現は原文のままです。ただし、簡体字（中国の略式漢字）は編集の便宜上できるかぎり相当する日本の漢字に改めました。

2014 年 11 月
緑の地球ネットワーク

【入力ボランティア】
Ｏ．Ｍ．さん　Ｏ．Ｋ．さん
ご協力ありがとうございました。

GreenEarthNetwork